飯南町

ちょっと昔の思い出ばなし

イイナン

国道
54
ROUTE

国道54号のあゆみ

国道54号。飯南町の真ん中を縦断するこの道は、
私たちの生活を支える大動脈。
通勤、通学、買い物など毎日お世話になっています。

古くから陰陽連絡道路として、
産業・経済・文化の交流に大切な役割を担ってきた
この道にも、いろんな歴史がありました。

そして、54号のあゆみとともに
私たちの生活も大きく様変わりしてきました。

北の玄関「晴雲トンネル」

かつての国道は、頓原の町並みを抜けて『吹ヶ峠』に登るつづら折れの道で、赤名峠に次ぐ難所でした。
昭和36年（1961年）10月晴雲トンネルの工事が着工され、昭和39年（1964年）10月24日に開通した『頓原有料道路』と『晴雲トンネル』（1120m）により、吹ヶ峠の難所も解消されました。この新しい道路により、9km弱の峠越えの道は半分以下に短縮されたのです。

南の玄関「赤名トンネル」

急な登り坂でカーブが続く県境の『赤名峠』は、広島～松江間最大の難所。冬の積雪で度々止まり、路線バスの乗客が降りて後押しすることも。
昭和36年6月に着工された赤名トンネルは、3年余りの歳月と巨額の費用を投じて、昭和39年9月16日に開通しました。
峠の直下を貫くこのトンネルにより、4.8kmの赤名峠越えは2.8kmに短縮され、最大の難所は解消されました。

そして54号へ

二つの工事の最中の昭和38年４月、
二級国道182号は、一級国道54号へと昇格しました。
この時から、私たちになじみの『R54』となりました。

『R54』以前、玄関を持たないころの飯南町の暮らしって、どんな様子だったのでしょうか。

私たちが思うところの「不便」なんてものともせず、
地域を愛し、明るくたくましく生きる人々。

語られる言葉から、残された資料から、そんな姿が見えてきます。

もくじ

国道54号のあゆみ

むか〜しむかしの我が町は…….....1

ちょんぼし、たたらのおはなし...2

- 「たたら製鉄」って何？.....2
- 鉄穴流し.....3
- なんでこの地で「たたら」だったの？.....3
- 現代に残るもの.....4

三日市 今昔.....5

- 三日市大火と恵比寿さん.....5
- you meのタウン 三日市.....6
- 令和の今、三日市復活.....7
- 三日市古地図.....8

思い出ばなし、語っていただきました.....9

いよいよ開通!! それからどうした?.....10

【晴雲トンネル】.....10

- メインルート「吹ヶ峠」／銀座通り？都加賀..10
- 晴れの日、開通式／料金所、通過!!.....11
- 試練！ 冬の吹ヶ峠超え.....12
- ありがとう、ブル！.....13

【赤名トンネル】.....14

- 押せ押せ、峠道！.....14
- 親孝行なドライバー、パレードの華.....15

その頃の暮らし、町のようす.....16

- 頓原の大火.....16
- 廻り舞台の頓原劇場.....17
- 小さな町に大きな力士、相撲の興行..18
- そして映画の時代へ.....19
- リモート授業？ サンパチ豪雪.....20
- 日本酒天国！ 当時のお酒事情.....21
- にぎやかな赤名の町.....22
- 舗装の道！ 走る流行りの車.....23
- 昭和のわんぱく少年たち.....24
- 全てが完結、町のくらし.....25

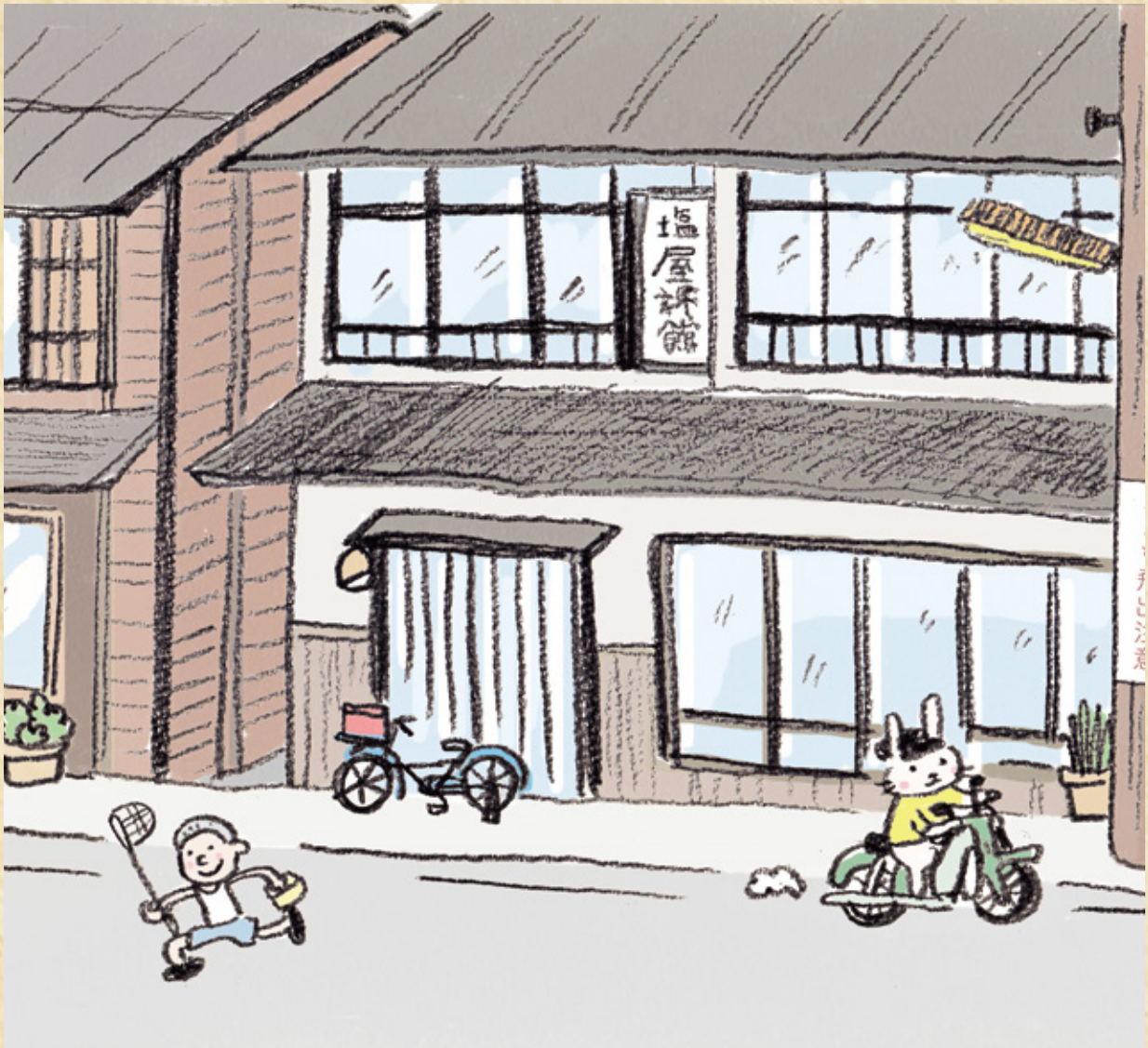
きらりと光る宝物たち.....26

- 一子相伝！ 香茸のヒミツ.....27
- 「はで」って、ホントすごかった！.....28

むかし懐かしの写真たち.....29

あとがき.....32

むか〜しむかしの
我が町は……



ちょんぼし、たたらのおはなし

かつてこの地では、各所でたたら製鉄が行われていました。
「たたら」なんて聞くとすごく昔のことのようなイメージがあるけれど、実はそんなに遠くない過去のお話です。
大正時代まで行われていたといいますから、おじいさん、おばあさんは、ご存じの方もいらっしゃるでしょう。

▲玉鋼

▲かなくそ（鉱滓/こうさい・のろ）

「たたら製鉄」って何？

粘土製の炉の中に木炭と砂鉄を入れ、木炭を用いて還元することによって鉄を作る方法。現代の製鉄法と比べると生産効率は悪いものの、極めて純度の高い鋼「玉鋼」を作り出すことができました。
村下（むらげ）と呼ばれる責任者のもと、製法によっては3日間、または4日間作業に当たり、鉄を生み出してきました。
「たたら」というのは、製鉄の最中に火力を強めるために使う鞴（ふいご）のことで、広い意味でそれを収めた建物のことも指します。

鉄穴流し（かんな）

まずは原料集めから。
山を掘り崩して、砂鉄を含んだ土を水路に流します。急な流れを利用して、軽い土砂は下流に流れ、重い砂鉄は洗場の水底に残ります。この作業を繰り返し、比重の差を利用して砂鉄の純度を上げて採取します。
この作業が「鉄穴（かんな）流し」です。

▲鉄穴流しの跡

なんでこの地で「たたら」だったの？

このあたりの土地は良質の砂鉄を多く含んでいたため、たたら製鉄が盛んにおこなわれてきたのです。
明治12年ごろには、国内の鉄の生産量の約50%を島根・鳥取両県が占めており、中国地方では約87%を占めていました。

もう一つの主役、「炭焼き」を忘れないで！

たたらの主役は砂鉄だけれど、忘れてはならないもう一つの主役が「木炭」。
「木炭」によって砂鉄を還元させ、砂鉄を純化させて良質の鋼（はがね）を作り出していたそうな。
そして、たたら製鉄が姿を消した後も、「炭焼き」は農家の仕事として暮らしをしっかり支えてきたのじゃ。

現代に残るもの

▲小田地区にある
鉄穴流しの跡に残った水路

鉄穴流しは、今、私たちが住むこの町の地形にもずいぶん影響しています。
来島・小田地区にある和田八幡宮から入った少し奥の方でも、かつては鉄穴流しが行われており、その場所に行ってみると水路や池の跡がわかります。

▲野萱鉄穴流し跡めぐり案内看板

「歴史的価値のある土地を、より多くの人に知ってもらいその価値を共有したい」という想いから、平成20年度に案内看板が設置されました。

来島・野萱琴麓地区内を歩いてみると、段々になった田畑が目につきます。砂鉄を取るために削った跡地が棚田として利用されており、案内看板も建っています。そんな目線で見ると、町内あちこちに形跡があることがわかり、おもしろいです。また、屋号「鍛冶屋（かじや）」「村下谷（むらぎや）」「前鉄穴（まえがんな）」などは、たたら製鉄に関わる土地の名残です。「金屋子神社」という中国地方に多い神社も、たたら製鉄に関係した神社で、飯南町内にもいくつかあります。私たちの大先輩が残した跡が、今の私たちの暮らしの基盤になっているのですね。

三日市 今昔

全国各地にある地名「〇〇市」の中の一つ、「野萱三日市」。
大正の初めごろ、春から夏にかけて行われていた「みの市」が、毎月三日にあったことから、「三日市」という地名になったといわれています。
当時は、小田・真木の辺りから竹細工・わら細工を、頓原からは鍛冶屋さんが鍬を、遠くは広島県高野からも草みのなどを売りに来ていました。
毎月三日を楽しみに、各地から人が集まり賑わっていたことでしょう。

▲当時のはやしこ

▲現在の恵比寿さん

三日市大火と恵比寿さん

毎年9月23日、三日市の恵比寿さんの例大祭が開催されます。元々は別の日に行われていたお祭りでしたが、約百年前にこの日に開催されるようになりました。大正２年９月23日、三日市を襲った大火。実は、この大火を忘れないためのお祭りが始まりなのだそうです。
現在の恵比寿さんは、みこしの練り歩き、富くじや当日限定のお食事処がメイン。一昔前は、東京音頭、炭坑節、仮装行列、カラオケ大会などなど、地元の有志主催のイベントとして、いろいろ趣向を凝らして楽しんでいたようです。今も続く「来島精神」のたまものだったのですね。

you me のタウン 三日市

昭和20年代、その当時の三日市は、散髪屋が5軒とパチンコ店6軒、酒屋・旅館・自転車屋が各2軒、医者に歯医者に薬局と産婆さん、食料品店に肉屋さんに魚屋さんと豆腐屋さん、衣料品店に下駄屋さんに雑貨店と文房具店、郵便局に銀行、駐在所……と、大概のものはそろっていました。みんなの楽しみの一つとして、地元の月尾根楽団（後にニュースター楽団）や、芝居や映画を観ることのできる来島劇場もありました。

ちょっと昔のショッピングモールのような感じで、すべてがそこにあった三日市。

そして、忘れてはならない火事の教訓が、今の町並みにも生きています。軒下から水路まで一間は空ける、隣の家とは間を空けるなど……歩いて探せば、いたるところに昔の風情が。今もその名残を見つけることができますよ。

◀現在の三日市の様子
軒下から水路まで一間空け
隣の家とも間を空けている

令和の今、三日市復活

だんだんと商売をやめる家や空き家が増えてきており、このままでは廃れてしまうという危機感が住民の皆さんにもありました。来島地区（三日市周辺）の住民に声掛けをして、その結果、三日市復活の機運が高まりつつあります。

「以前の賑わいを取り戻したい……」

「昔のえびすさんを復活させたい……」

そんな想いで、三日市の『鐘や』でのイベントを企画・実施しています。

またイベントの時だけでなく、普段から三日市の町を盛り上げたいと、軒先にプランターやベンチなどを置く家も少しずつ増えてきました。また、飯南高校の生徒が下校する際、夜になると暗いので、三日市自治会でソーラーライトも設置しました。三日市の町が暗いシャッター通りにならないように意識しています。

令和4年には「ブランドメッセージフェスティバル」が三日市の町でにぎやかに行われました。あの時の盛り上がりを忘れないように、復活の火を消さないように。

これからも、美しい三日市の町並みや地域の拠点「来島交流センター」を活用しながら、住民が手を取り合い、復活に向けての歩みを進めています。

▲三日市にある築100年の旧塩谷旅館をリノベーションした「鐘や」

三日市古地図

むかしのキジマデートスポット

- 塚原八幡宮
- 来島劇場
- オートバイで三瓶や三次におでかけ

むかしはこんなこともしていた!?

- 火薬(ダイナマイト)
  ※工場は三次
- 塩
- 醤油
- こうじ

えびすさま一大イベント

- 東京音頭
- 炭坑節
- 仮装大会
- こむ僧
- ピエロ
- 女装
- 蛇踊り

思い出ばなし
語って
いただきました

いよいよ開通!!
それからどうした？

▲当時開通した54号。写真は開通式のパレード

メインルート「吹ヶ峠（ふきがたわ）」

当時は、波多からも都加賀を通って頓原、赤名へ来ていた。
高校の試験を受けるときも、歩いて都加賀を通って吹ヶ峠を越えて小才田を抜けて、頓原の青年学校で試験を受けた。嫁に来るときは、タクシーで都加賀を周って頓原へ来た。里帰りするときはバスで帰った。途中でバスを降りて、都加賀の親戚に寄ったこともある。

銀座通り？ 都加賀（つがか）

子どもの頃は前の道を人がたくさん歩いていた。広島と松江を結ぶ街道筋で、バスの便は朝早くから、夜6時～7時まで、日に6、7本あった。
出雲と三次のちょうど中間点で、どちらへも料金は一緒ぐらいだった。バス道は直線道路で、ずーっと向こうからバスがゆっくり来るのが見える。停留所に座っていて、遠くにバスが見えてから準備しても間に合った。

晴れの日、開通式

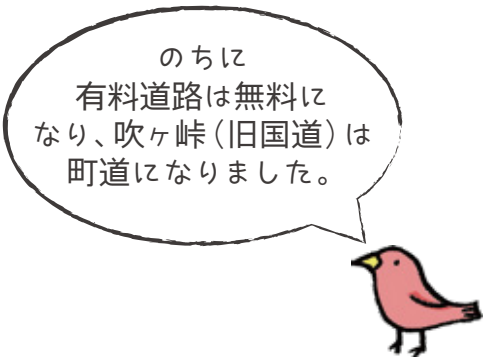
トンネル開通式は、車がずらーっと並んでパレードをした。当時、建設会社に勤めていて工事関係者だったから、トラックの荷台にホロを掛けてそこに乗った。何台も連ねてトンネルを通り抜けた。婦人会は、小学校の校庭で頓原音頭をにぎやかに踊った。

▲開通式のパレードの様子

▲当時の頓原料金所

料金所、通過!! = 3

軽自動車が40円くらい、普通車が100円くらいだったかな。料金所には人が勤めていたが、夜はいなくて無料だったと思う。波多に嫁に行った姉のところにオートバイで行くには、料金所を二箇所通らないといけなかった。国道54号は地元の者も払わないといけなかったが、町（頓原）に出たりするには関係ない場所にあったから普段はあまり通らなかった。通るのは町外に出るとき。自家用車を持つようになってからは、旧道を通らず、いつも新しい54号でトンネルを通って行った。雲泥の差。便利になった。



▲当時の料金所の通行券
（写真は自転車通行券）

▲吹ヶ峠

試練！
冬の吹ヶ峠超え

小学校高等科は歩いて吹ヶ峠から頓原へ通った。7時頃に家を出て、雪のないときは1時間ちょっとかかる。冬は国道でも道路が止まる。誰も道を開けない（除雪しない）から、6、7人で歩くのに、前になったり後ろになったり交代しながら進んだ。

郵便局も、冬は頓原の局から入間の局まで「逓送（ていそう）」といって人が郵便物を背負って運ぶ。いつも同じ辺りで逓送の人と行き会った。そこから先は道が開いている。逓送の人も自分たちと会うのを待っていた。

ふつうは授業が始まるまでに着く。一度、大雪で、みんなで前になり後になりして学校に着いたら12時前だったことがある。先生が、「囲炉裏の前でご飯（弁当）を食べろ、食べたら都加賀の者はすぐ帰れ」と言った。そもそも今なら絶対に行かせないが。

ありがとう、ブル！

３月になり、雪がもう降らないと見越したころ、頓原住民を総動員して雪掘りをした。集落割り当てで、ここからここまでと決めてみんなで掘った。赤名も、来島もみんなで人を出して、入間くらいまで車が通れるようにした。全て人力だった。雪が多いときは車は通れない。降らなくなるころを待って、道を開ける。

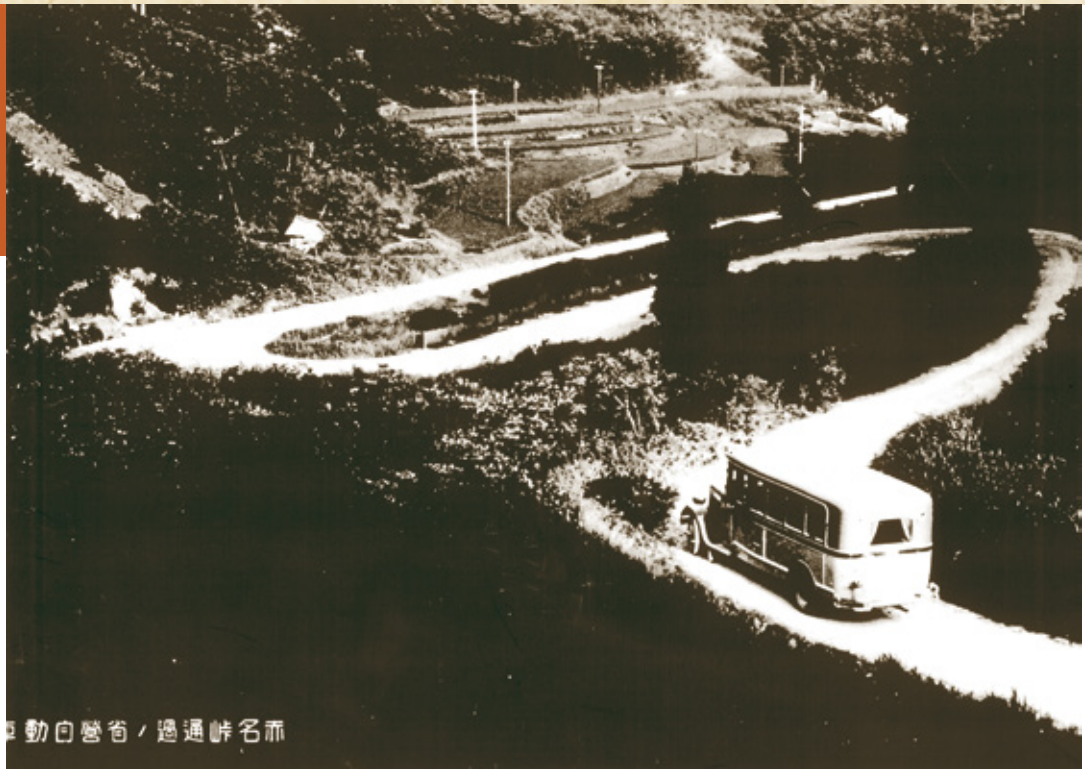
ブルドーザーでの除雪は昭和38年が初めて。晴雲トンネル工事で来ていたブルドーザーを使って除雪した。初めて見たときはたまげた。

それからはブルでの除雪があたりまえになった。

▲サンパチ豪雪時の雪かきの様子

▲当時のブルドーザーによる除雪

▲現在の除雪の様子

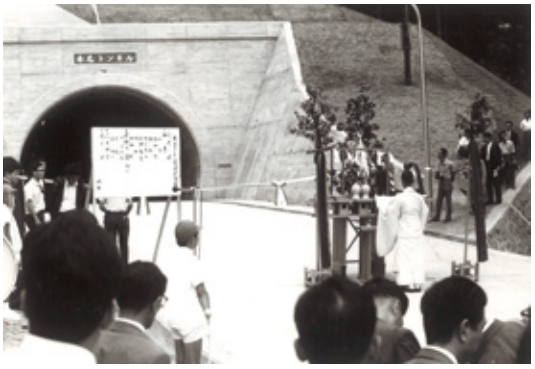


▲赤名峠を通過するバス

押せ押せ、峠道！

明治に国道が出来てからは、行き来がしやすくなった。日露戦争当時、広島師団が三瓶を演習場とし、そのために大改修が行われたらしい。

以前は、国鉄バス、一畑バス、広島電鉄のバスがあった。はじめは木炭バス。今のバスと違って前が出っ張ており、そこにエンジンがあって人力で回してエンジンをかけていたと思う。峠では、雪の時にバスから降りて押したことがある。ガソリン車になってからでも、大人数が乗っていると、重くて峠を上がらず、降りて押した。夏でも押した。



▲赤名トンネル開通式の様子▲

親孝行なドライバー、パレードの華

昭和36年に車の免許を取った。「運転免許証なんか取ってなにするんだろうか」という時代。浜乃木の自動車学校の第３期だった。自動車学校のコースは泥道で、竹を切って荒縄で結んだ壁を通るような指導だった。

昭和39年10月10日が東京オリンピックの開会式だった。聖火リレーのパレードに運転手として参加するように言われた。町長、上市の運送屋、商工会、赤名酒造の４台の車があった。人を乗せてもいいと言われたから、父親を助手席に乗せた。すごく喜んでくれた。当時の国道は赤名の町の中を通っていた。にぎやかに普段の３倍も４倍も人が出ていたと思う。

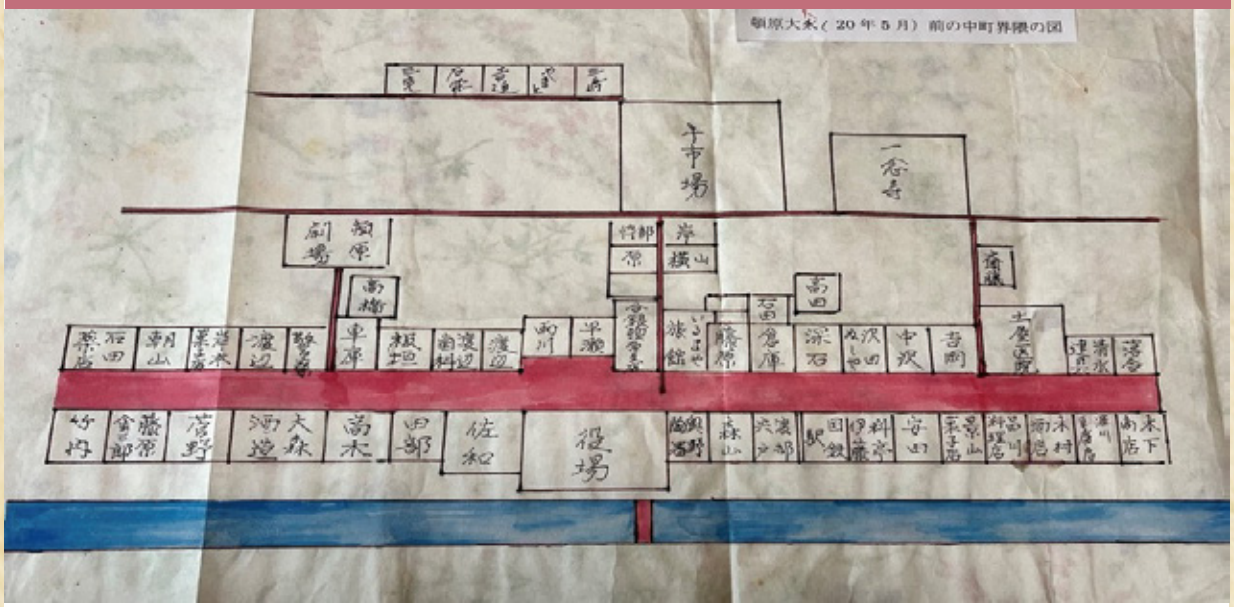
今のバイパスは、天皇陛下が植樹祭で来られた時に、突貫工事でできた。

▲聖火ランナーと共に走るパレードの車

▲赤名トンネルを走る聖火ランナー

▲植樹祭に訪れた天皇陛下のお車

その頃の暮らし、町のようす



▲頓原大火前の中町界隈の絵図

頓原の大火

大火があったのは昭和20年、自分が5歳のときのこと。道路があって、水路があって、道路沿いの部屋で寝ていた。

どこかのおじさんが「火事だー、火事だー！」と叫びながら走っていった。その声が、今もこの耳に残っている。裸足で走っているのを見た。

うちは焼けなかったが、明くる朝に焼け跡を見に行った。屋根からまだ煙が出ていて臭かった。

その日にその家のおじさんは、わらじを履いて出征していった。家が焼けたからといって出征をやめるような時代ではなかった。

昭和18年に新しい役場が建っていたが、それも2年で焼けてしまった。立派な役場だった。

全面にガラスがあったが、四角い窓が熱で溶けて、ポトン、ポトンと落ちていくのを見ていた。

▲昭和18年に建設された頓原町役場

廻り舞台の頓原劇場

以前森林組合があったところに大きな建物があった。『頓原劇場』といって、廻り舞台があった。舞台が半分になっていて、表で芝居をして場面が変わると、後ろに次の準備がしてあって、ぐるっと回す。舞台の下に人が入っていて、何人もの人力で回す。そういう舞台だった。都会にはたくさんあったけど、田舎では珍しいことだった。升席もあって座ってみるような感じ。

興行を打つときは、町の中を、役者さんが衣装を着て旗を持って、チンドンやって予告して歩いた。

「切狂言といたしましては〇〇、舞狂言といたしましては〇〇……」

と宣伝した。

乗空寺のところにのぼりが立っていて、子どもがのぼりを持ってついて歩くとタダで入らせてもらえたので、のぼりの取り合いになった。家の押し入れに芝居の幕がたくさんあったが、残念ながらそれも火事で焼けてしまった。

▲にぎわう頓原の通りと子供たち

小さな町に大きな力士、相撲の興行

じいさんが興行師をしていたころは相撲が来ていた。今の地方巡業は相撲協会がするが、あの当時は部屋ごとに巡業し、うちには「二所ノ関部屋」が来ていたようだ。

番付の下の力士さんはお寺、一念寺や乗空寺に泊まった。少し上の力士さんは各家庭に泊まる。一福は旅館をしていたから、そこでも何人か泊まった。うちにも一人泊ったけど、覚えているのは布団を敷いて横になったら足が出ていたこと。まだその頃はたんぱく質がそんなにないから、ニワトリなどでもてなしていた。

土俵は手作り。部屋詰めの呼び出しや行事さんや若いもんもいるから、ちゃんとした土俵を作った。観客席は木の足場をして板を並べて階段状にした。外で屋根はなく、興行が済んだら全部壊す。じいさんが勧進元をしていた関係で、家に木製の番付表が残っているが、昭和32年と34年のものだ。

▲昭和32年の木製番付表

そして映画の時代へ

▲実際の映画ポスター
当時のポスターは手描き

父親の代は、興行をやめて映画館を建てた。

来島も赤名も劇場があった。映画のフィルムと機材を持ってそこへ行く。フィルムは1本20分くらい。1時間ちょっとの映画になると、かなりの高さになる。それを麻袋に入れて順番に映すが、たとえば頓原と来島で同じ映画をやろうとすると先に1本始めて、途中でオートバイでフィルムを運んで掛け持ちでやった。フィルムが焼けたり切れたり、途中で映画が止まることもあった。

ほとんど毎日やっていて、夕方になると父親が拡声器で

「今日行われる映画は〇〇……」

と宣伝した。大人で60円、80円くらい。夕方になると、ここの前を人が座布団を抱えてずらーっと並んでいた。

映画館の中は、まずステージがあり、その下が板場になっていて座布団を持って座る。その後ろは土間になっていて、木の椅子、ベンチみたいなのが並んでいた。

2階から映写技師さんがスクリーンに向けて映す。そこにもなんぼか席があったから、2階に上がる人もいた。指定席なんかない。好きなところに座る。

映画は、白黒から始まって、一部カラーになったり途中で切り替わったり。

そのあとで総天然色のカラーになった。美空ひばりとか、そんな映画だった。

さらに時代は移り…

35年頃からテレビが出始めた。
あっという間に普及していって、
映画が無くなっていった。

リモート授業？ サンパチ豪雪

昭和38年、今とは比べ物にならない、想像以上の雪が積もった。
電線や2階まで積もっていて、1階からは出られない。2階の窓が玄関のようだった。外を歩くときは電線をまたいで歩かないといけないほどの雪だった。

豪雪の間は、小学校はしばらく臨時休校だった。その間の授業は、学年ごとに時間を決められ、先生が「町内放送」を使ってしていた記憶がある。今でいう『リモート授業』のようなものか。

▲電線近くまで積もった赤名

▲サンパチ豪雪時の三日市

豪雪で外からの物資が止まってしまい、食料困難になりそうなものだが、そこまでひどいことにはならなかった。各家庭で工夫して過ごしていた。
特に印象に残っているのは、近所の家が飼っている豚などを捌いて、おすそ分けしてくれたこと。たくさんの肉がうちにまわってきた。
当時、あれほど肉を食べたことはない。

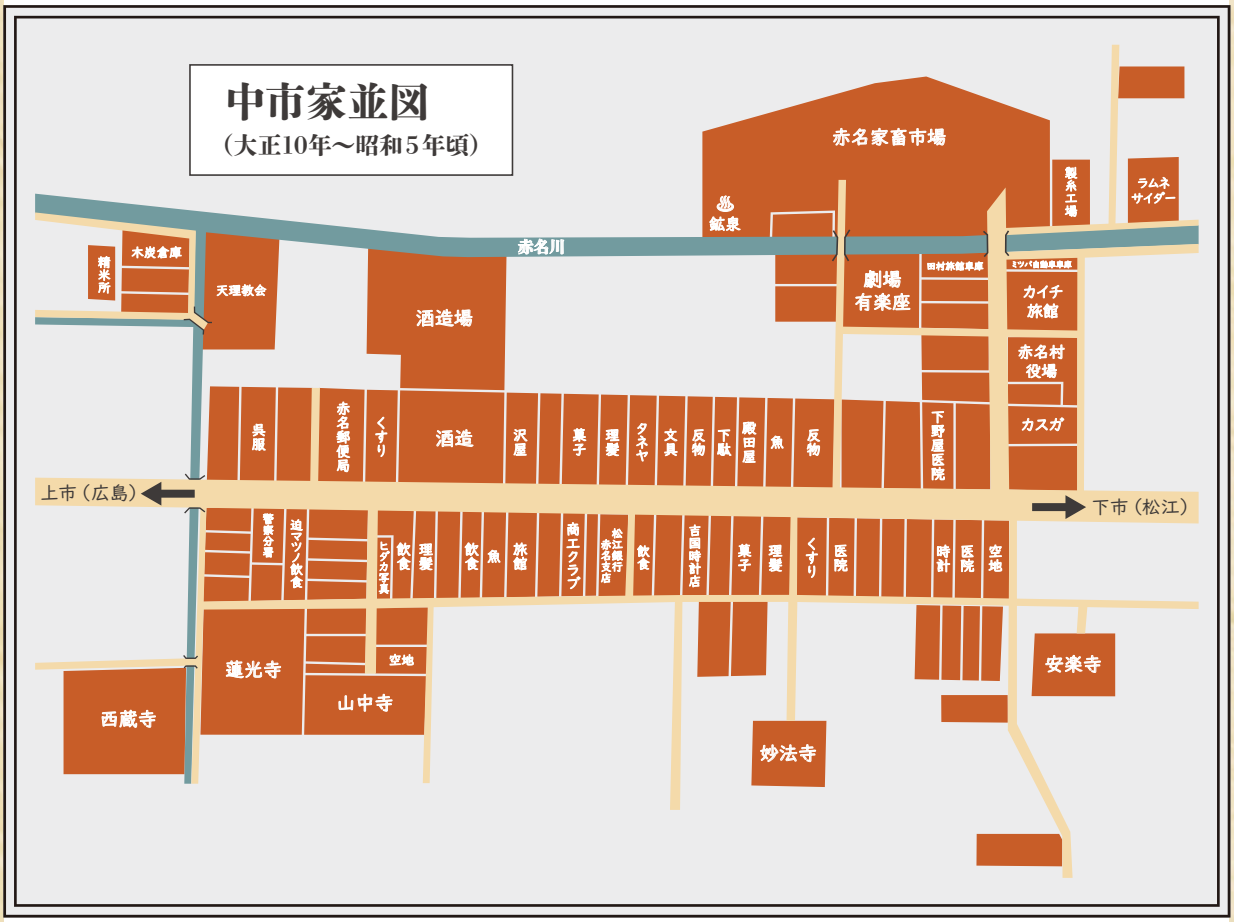
▲豪雪時に頓原へ来たヘリコプター

日本酒天国！ 当時のお酒事情

昭和37年頃は、赤名に飲み屋が11軒もあった。酒屋は夕方御用聞きに歩いて、頼まれた分を配って回る。
「今日は少ないけぇ1升でいいわぁ」というような買い方。1本と言わず1升。

10本入りは木の箱だった。昔は酒ばかり、ビールもまだ無い。何かと言えば酒を配った。棟上げ、結婚式、とにかくお客さんが来れば酒を出した。赤名はもちろん、角井、奥畑、行かない家はないぐらい行っている。
掛合の酒屋が、酒を3斗持ってこいということがあって、持っていった。車でも今みたいに、30、40分では行かれん。
「遠いところをありがとう」と喜んで、酒を出してもてなしてもらったことを鮮明に覚えている。

▲お正月の酒屋（写真は来島地区）



▲赤名中市家並図（大正10年～昭和5年頃）

にぎやかな赤名の町

町中はにぎやかだった。半夏市は100円の小遣いを握って行った。
映画館もあってサーカスも来た。サーカスはとても楽しみで、2か月くらい前から小屋が建つから、学校の帰りに寄って行った。
「蓑市」も賑やかだった。冬の間に農家が山から「くさ」を採って干しておいて、冬仕事に「蓑」を作る。安いのはわら蓑。高いのは「かんすげ」の蓑。新しい年の野良仕事の前に持って出て売る。作らない人は買う。赤名峠を越えて牛も売りに来て、あとは飲んで帰る。
秋の祭りも、赤名は1つでやるので賑やかだった。祭りの日にはヘカ（クジラのすき焼き）や、ニワトリ、ワニ（サメ）の刺身を食べたもんだ。

舗装の道！走る流行りの車

▲当時、砂利道だった54号

トンネルが開通し、バイパスもできて、昭和39年の東京オリンピックに合わせて、三刀屋の方まで道路が舗装された。それまではどこも砂利道だった。

39年は勤めて4年目。その頃から車が流行りだして、マツダやホンダが360ccの軽自動車を作った。『N360』という車。当時は30万円くらいだった。トヨタの普通車『パブリカ』は、600ccくらいだったか。

▲現在の和南ヶ崎橋付近の54号

昭和のわんぱく少年たち

▲子どもの頃に使用した
折りたたみナイフ

今に比べると子どもがたくさんいて、自分の学年だけでも80人くらいで2クラスあった。おそらくいちばん子どもの数が多い世代。

両親はどちらも働いていて、よく子どもだけで山や川で遊んだ。折りたたみナイフを持っていて、それを使って木や竹を切ったりして剣を作り、チャンバラごっこなどをした記憶がある。

山や川、お寺やグラウンド、空き地に木材場。浄土寺の方に監視員のいない誰でも入ることのできるプールもあり、よく遊んだ。今のように熊の心配をされることもなく、熊鈴もなかった。

川では釣りをしたり泳いだりした。

近くのごみ捨て場（今のように収集所はなく、野菜の皮など自然のごみを捨てる場所があった）にミミズがよくいたので、釣りの餌にした。今とは川の形が違っていて、魚もよく釣れたのを覚えている。

上級生から「この生き物は危ない」「この植物は食べられる」などいろいろ教わった。喧嘩をすれば叱られるし、遊び方を教えてくれるのも上級生だった。面倒を見てくれて、そういった姿を見て成長した。今思うと、子どもたちが自由に遊びまわり、自分たちで経験し学ぶようないい時代だったと思う。

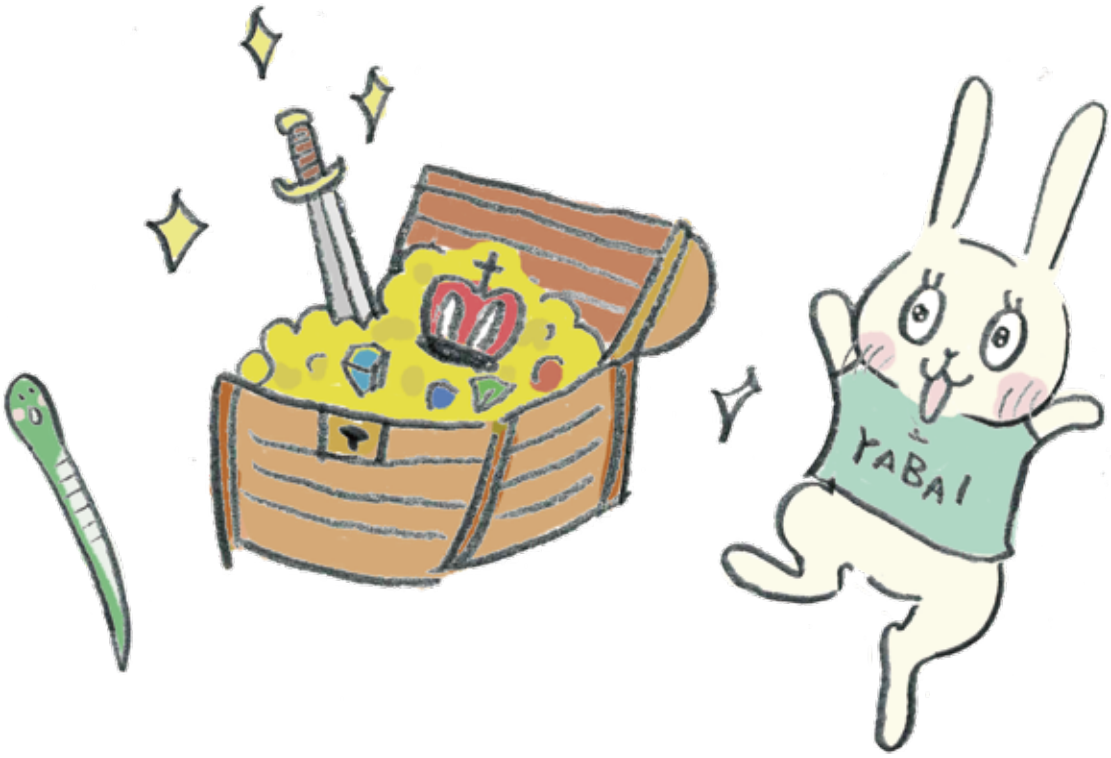
全てが完結、町のくらし

当時の生活は、頓原だけですべてが完結していた。個人商店も多くあり、どこもにぎやかで町の中でお金が循環していた時代。
ほとんどが農家だったので野菜は自家栽培、肉もあり、魚屋もあった。
個人病院や、駄菓子屋、文房具屋、家電屋、クリーニング、饅頭屋……など、いろいろあった。特に記憶にあるのは、魚屋には大きなワニ（サメ）が売られていて、店頭で捌くようなことがあったこと。今ではなかなか見ない光景だ。

こんなふうに町の中でいろいろ用事は済んだので、出雲や松江にわざわざ行くようなことはあまりなかった。そもそも自家用車などなくて、遠くへはバスに乗って出かけるような時代だった。
当時に比べて今は、空き地や空き家が増えたかもしれない。しかし、町並みとしては、当時の面影と大きな変化はないように思う。

▲当時の頓原の町並み

きらりと光る宝物たち



一子相伝！ 香茸のヒミツ

みなさんは「香茸」をご存じでしょうか？
「香るキノコ」と書くそれは、知っている人ならば喉から手が出るほど欲しい逸品です。その名の通り良い香りのするきのこで、味は美味。あまり世間では知られていないけど、知る人ぞ知るレアきのこです。市場に出れば1本数千円の値が付くこともあります。

香茸が生える場所を「代（しろ）」といいます。昔の人は香茸採りに代に行って、まだ小さければ、誰かに盗られないように大きくなるまで弁当持ちで番をしたそうです。秘密にしている代のことは「囲い代」といい、そこに行く時は人に見つからないよう背を低くして足跡を付けないように気を配り、採った跡は木の葉で隠していたそうです。大切な囲い代は、家族にさえもそのありかを秘密にしていて、継がせるときは子供たちの中でたった一人だけに教えるのだとか……まさに一子相伝！

香茸を採取するMさんは、こう語ります。
「香茸は近くに行くと、ほんにいい香りがするんよ。クマもきのこが好きだから、競争して採らにゃ」
採った香茸は茹でてアクを抜き、しょうゆをつけて食べるそうです。いい香りと食感が相まって絶品！
ああ、食べたい！

▲山に生えた香茸

「はで」って、ホントすごかった！

◀稲架（はで）の様子

黄金に実った田んぼの稲が刈り取られた後に、稲架（はで）が立ち並ぶ懐かしい秋の景色。今では超高級の「稲架干し米」を、どの家でも当たり前のように食べていました。

昼間に稲を刈り、干して、寄せて、はで木にかけ始めるのはたいてい夕方から。暗闇の中、灯りを灯しながらの作業になる……。しかも、お父さんはサーカスのようにてっぺんに登って稲を掛け、お母さんは絶妙なタイミングで下から投げ上げる。家族で助け合わなければ絶対にできない作業です。一番上には雨が入らないように「こも」を巻いてフタをする。稲架に掛けられた稲は、約20日間、太陽の恵みを浴びながらゆっくり乾燥する……。ここまで手間をかけるのだから、美味しくならないはずがありません。

稲架干しのもう1つの収穫は「稲わら」。米を入れる俵もわらで編み、「こも」や「むしろ」もわら、小さな草履もわらなら、大きな家だって「わらぶき屋根」でした。農作業に欠かせなかった牛の寝床も餌も、わらを混ぜて食べさせていました。糞と敷きわらは絶好の堆肥となり再び田んぼへ。そしてまた人も牛も元気に働き、栄養たっぷりの田んぼに黄金の稲が実る……。なんてエコな、SDGsな時代だったんでしょう。

やっぱり「はで」ってスゴイ！

むかし懐かしの写真たち

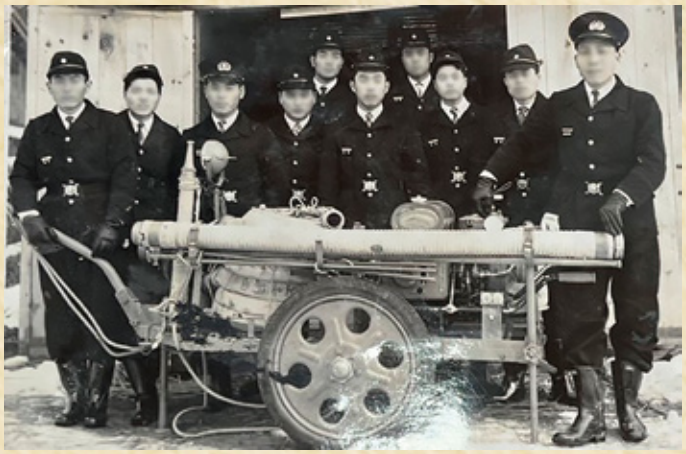
嶋　1
あ　0000

▲当時の自動車ナンバー
※イメージ

当時のジープ

大正～昭和初期頃の冬服マント

当時、走っていた国鉄バス
修学旅行の際は貸し切りだった



当時の消防ポンプ（中央の細長い筒）

米の出荷の様子

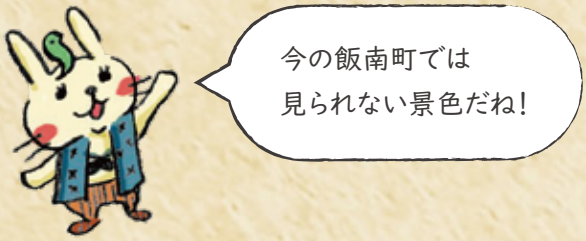
耕運機

赤名スキー場入口

頓原の石切り場

来島 高橋付近

来島にあったプール



晴雲トンネル開通時のパレードは、現在の「ふれあいホールみせん」の場所が休憩場所となっていた。
写真は、パレードに参加した人たちが休憩している様子。

頓原料金所で行われた交通安全PR

赤名トンネルを走る
聖火ランナー

あとがき

たくさんの方のお話を聞き、たくさんの資料をめくり、たくさんの写真を目にして、改めて、我が町飯南町の歴史を知りました。
「その時」を生きた生の言葉はとても力強く、かけがえのないものに思えます。
貴重な歴史のひとコマを、少しでも、ここに留めるお手伝いが出来たことをうれしく感じると同時に、勇気をもらった気がします。
私たちの次の一歩も元気に進めていこう！

既刊本

飯南町
マニアック&おもしろ
歴史ばなし

島根県
飯南町と大しめ縄

監修

島根大学教授　作野広和

企画・発行

飯南町国道５４号活性化
アクションプラン推進協議会

文・編集

大井玲子・奥野恵子・古賀崇真子・
前田千紗・松田勢津子

挿絵

安藤夏樹さん

協力

石川隆さん・奥野スイ子さん・奥野寿悟さん・奥野康江さん・景山一さん・景山八代江さん
景山良一さん・烏田勝信さん・清原英人さん・土池博子さん・朽木宣夫さん・鳥屋ヶ原美子さん
内藤文男さん・信藤一郎さん・深石尚武さん・藤原恒夫さん・藤本寛人さん・三上大輔さん
森雅裕さん・安原征治さん・山碕延男さん・山本活稔さん・吉岡達雄さん
飯南町教育委員会・飯南町役場・国土交通省松江国道事務所頓原維持出張所・頓原公民館

参考文献

『赤来町のあゆみ』（島根県赤来町）・『あかぎの四季と健康料理』（赤来町食生活改善推進協議会）・『出雲・赤名 あのころの思い出歳時記』（夢見草の会）・『ふるさとおだまき』（小田・真木地区老人クラブ）・『松江国道のあゆみ』（国土交通省中国地方整備局松江国道工事事務所）・『むかしの赤名』（赤名伝承記録会）

参考資料

「頓原の大火前の中町の図」（深石尚武）
「昭和24年頃の三日市町中地図」（景山良一）
「三日市について聞き取り調査」（景山良一）

国道
54
ROUTE